backlog
by nulab

導入事例12選



Backlog導入事例 12 選

Case 1
トヨタ自動車株式会社
トヨタ自動車のTCシャシー設計部で試行した
Backlog AIアシスタントによる現場変革

Case 2
西部ガスホールディングス株式会社
Backlog導入後、同時並行できるプロジェクトが5倍に！
西部ガスホールディングスのチームワークマネジメントを公開

Case 3
経済産業省
経済産業省が事務作業を3分の1に削減！
行政手続オンライン化の一翼を担う

Case 4
株式会社ふくおかフィナンシャルグループ
BacklogとNulab Passが金融DXの一助に
～ふくおかフィナンシャルグループDX戦略の秘訣とは～

Case 5
株式会社横浜国際平和会議場（パシフィコ横浜）
運用コストを40分の1に削減した、
大規模Webリニューアルプロジェクトにおいて Backlogを活用

Case 6
株式会社デジタルキューブ
Backlogは単なるタスク管理ツールではない！チームの連携を
深め、プロジェクトを成功に導く“シン・Backlog運用術”

Case 7
株式会社primeNumber
Backlogの全社展開でチームの協働を促進。
会議を変え、タスク管理の工数も変えたBacklog活用法

Case 8
株式会社スターフライヤー
脱メールで業務効率化！スターフライヤーのパイロット・
客室乗務員・整備士のBacklog活用術

Case 9
株式会社オーディオストック
「JBUG」がBacklog導入の決め手に。
ユーザーコミュニティはリアルな活用方法や解決策を得る機会

Case 10
株式会社 ADX Consulting
Salesforceとの連携で問い合わせ管理をスムーズに！
バックオフィス業務も効率化

Case 11
Fukuoka Growth Next
福岡発！スタートアップ支援施設の事務局で、
タスク管理にBacklogを活用し業務を効率化

Case 12
株式会社キーワードマーケティング
Backlog導入で効率的な広告運用支援を。
対応案件は10倍に増えるも業務管理の手間は1/10に削減！

掲載内容は取材当時のものです。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 1

トヨタ自動車株式会社

https://backlog.com/ja/customers/case-study-toyota-ai/

TOYOTA

トヨタ自動車のTCシャシー設計部で試行した Backlog AIアシスタントによる現場変革

― Backlog×AI融合がもたらす「作業単位まで引き出せる現場ナレッジ」とは

車両部品の設計・開発管理にBacklogを活用してきたトヨタ自動車 TCシャシー設計部は、2025年8月からBacklog AIアシスタント（β版）を活用。日々の業務で書き込まれる"設計現場視点のデータ"とAIの組み合わせは、現場にどのような変化をもたらしているのでしょうか？



AI活用の効果

Backlog 導入前

- Backlog内の過去タスク探しに時間がかかっていた
- 業務振り返りや、類似業務の担当者を探すのに手間がかかっていた
- 自部門固有の業務ナレッジを扱えるAIが限られていた

Backlog 導入後

- **あいまいな表現でも関連業務を横断的に検索でき、ナレッジにアクセスしやすくなった**
- **業務の振り返りをAIが支援し、面談準備の負担が軽減された**
- **Backlogに蓄積した情報がデータベースとなり、業務マニュアル化への道筋が見え始めた**

業種
製造・メーカー

利用部門
設計開発

世界有数の自動車メーカーであるトヨタ自動車株式会社。
自動車の足腰とも言えるシャシーの設計を担当するTCシャシー設計部では、自動車のステアリングやサスペンション、ブレーキなどの設計業務を担当。2021年頃、労使協議の中でデジタル化をトップレベルまで引き上げるという方針が示され、部内の有志メンバーによってDX推進グループを発足。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

より自部門の業務知識を活かせるAIを求めて

▶ Backlog AIアシスタント導入にあたって、セキュリティ面などの懸念はありましたか？

私たちにとって機密情報の管理は生成AIツール採否の重要なポイントです。

Backlog AIアシスタントの現行の利用規約 には入力データをAIモデルの機械学習や再学習に利用しない旨、また入出力結果は秘密情報として厳格に取り扱う旨が記載されております。

現時点で運用上の懸念は解消されており、引き続き情報の適切な取り扱いを意識しながら利用しております。

業務振り返りも、ナレッジ検索も、有識者探しも。Backlogの蓄積情報がAIとの融合で更なる価値を発揮する

▶ Backlog AIアシスタントを実際にどのように使っていますか？

いくつかの活用パターンが定着してきています。まずは「個人の業務成果の振り返り」です。

私たちは年数回、上司と面談をするのですが、日々多忙な中で業務を詳細に記憶することは難しいため、成果の振り返りに苦労します。そこでBacklog AIアシスタントへ下記の質問をしました。

私の業務の成果について振り返ってください。期間は○○。箇条書き形式で書いてください。1000文字以内にまとめてください

すると、Backlog内の記録をもとに、業務内容を整理する形で自分の成果をまとめてくれます。

▶ 出力の精度はいかがですか？

出力結果は非常に興味深く、単に「○○を設計しました」「書類を発行しました」という事実を正確に振り返ってくれる事はもちろん、更に向上した能力について追加質問をすると、「この業務を通じて〜の知識が高まった」「〜に対する思考力が向上した」といった、能力面についても、一般的な観点から整理したコメントを出力してくれました。

▶ 第三者の視点が加わることによって、仕事の価値を再発見することができたのですね。

また、「過去の類似業務の検索」にも活用しております。従来のキーワード検索では同じ意味でも表現方法が異なる言葉の揺らぎのため、欲しい情報を探すには試行錯誤が必要でした。

でも、Backlog AIアシスタントなら、あいまいな表現でも、類似の課題を横断的に抽出してくれます。

○○プロジェクトの○○○（業務名）に関係する課題を挙げてください

この検索では過去に誰がどのように対処したかまで把握することができます。

したがって当事者へ詳細を尋ねたい場合、従来は周囲の人々へ聞いて当事者を探す必要がありましたが、Backlog AIアシスタントによって、より容易に有識者へたどり着けるようになりました。





「知見を残す人」を見つけて表彰。ナレッジ蓄積の好循環をつくっていく

▶ 「表彰」にBacklog AIアシスタントを使われていると伺っています。

Backlogに知見を残す意識が高い人を3人挙げてください

こう聞くと、Backlog内の記録をもとに、理由付きで候補者をリストアップしてくれます。何度か言い回しを変えて試しても一定の傾向が見えたため、貴重な参考情報としました。

Backlogの課題の詳細欄に「仕事でのトラブル対処方法」「仕事を行う上での注意点」など、ナレッジを丁寧に残してくれている人を、評価につなげていく。そうすれば、「自分も知見を残そう」というモチベーションに繋がりますよね。今後は、もっとBacklogにナレッジを蓄積していきたいと考えています。

日々の記録がそのまま“AI用のデータベース”に

▶ これからBacklog AIアシスタントを使う方にメッセージをお願いします。

Backlog AIアシスタントの最大の強みは、普段は業務管理に活用している情報が、同時にAI活用のためのデータベース（=知的資産）構築に繋がる一石二鳥になっており、それは「現場の担当者が作業レベルで書き込んだ情報」だという点です。

Backlog上に日常的に記録される“現場の知見”を、AIが検索・整理して、再び現場へ素早く還元することで、改善（カイゼン）のサイクルをより速く回せる可能性がある素晴らしいツールだと考えています。

一般的なRAG*を構築しようとすると、まず「データベースをどうやってつくる？」という話になりますよね。でも、Backlogなら、日々の業務に使っているだけで、結果として「AI用のデータベース」が育っていきます。これは本当に大きな強みだと思いますし、お薦めしたいポイントです。

*外部データベースから関連情報を検索し、その情報をもとにAIが回答を生成する仕組み

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 2

西部ガスホールディングス株式会社

https://backlog.com/ja/customers/case-study-saibugas/

Backlog導入後、同時並行できるプロジェクトが5倍に！西部ガスホールディングスのチームワークマネジメントを公開



Excelやメールでのタスク管理をやめ、プロジェクト管理の変革に成功しました。
「売上や成果を上げる重点施策を行うチームにとって、Backlogの効果はとても大きい」と話します。
社内外のメンバーがワンチームとなって事業目標を達成するためにチームワークマネジメント※を強化。
Backlogはその一助となっています。

※チームワークマネジメントは、所属や組織が異なるチームやメンバーとの協働を前提としたタスクやプロジェクトを効率的に管理し、効果的に目標を達成するためのプロセスや手法です。

	Backlog 導入前	Backlog 導入後
チーム連携の効果	● 情報や関係部署も多く、タスクが複雑に絡み合っていた ● 社外のプロジェクトメンバーとも簡単にやり取りや資料共有がしたい	● 「誰が」「いつまでに」「どんな」タスクを担当しているか、チーム全員が一目でわかるようになった ● 1つのプロジェクトに社内外の関係者が集い、進捗やコミュニケーションがオープンになった
プロジェクト管理の効果	● メール、Excel、電話でのやり取りでは情報が散らかり、進捗の把握が難しかった ● キャンペーンを2つ同時並行で進めるのがやっとだった	● Backlogへの情報集約で電話の頻度が減り、メールはほぼゼロに。チーム全体の透明性が高まった ● 10以上のプロジェクトを同時に管理できるように。使いやすさと情報の一元化が大きな要因

業種
都市ガス製造・販売

利用部門
マーケティング

福岡を代表する都市ガス事業者として、90年以上の歴史を誇る西部ガスホールディングス株式会社。ガス・電気の自由化を背景に、近年はコア事業である都市ガス事業を軸に、電力などのエネルギー事業や暮らしサービス事業を展開。
「エネルギーとくらしの総合サービス企業」へと変革を遂げている。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

情報の集約と可視化で、進捗管理とチームコミュニケーションが効率化

▶ Backlog導入後の効果を教えてください。

圧倒的に電話の頻度が減り、メールはほぼゼロになりました。導入前は、Excelやメールでの管理で情報が散らかり、進捗状況の把握が難しかったです。Backlogに情報を集約するようになって、情報共有が円滑になり、チーム全体の透明性が高まりました。

コミュニケーションコストが激減したこともあり、社外ユーザーからも「円滑な進行に欠かせないツール」ととても好評です。

また、ナレッジとしての情報共有がスムーズになりましたね。新しく加入したメンバーへ、「課題を受け取ったら進めてください」「作業が終わったら担当者を変えましょう」など最低限のルールを機能で周知するだけでも、スムーズに業務が進んでいます。に簡単なマニュアルを作成しておけば、すぐに使いこなせるようになるので、新しいメンバーがチームに加わった時の研修の実施も楽です。

▶ チームメンバーとの連携面ではいかがでしょうか？

課題一覧やプロジェクトホーム画面で進捗状況を可視化できるようになりました。これによってチームメンバー全員が常にプロジェクトの全体像を把握でき、タスクの漏れや重複を防ぎ、プロジェクトをスムーズに進められるようになりました。

複数のプロジェクトを同時に進めている場合でも、全体の進捗状況を一目で把握できるのは、とても便利です。メールでは、このような全体像の把握は難しかったですね。プロジェクトを円滑に進めるためには、タスクごとに誰がボールを持っているかを明確にすることが本当に大事なので、担当者を変えるべき課題や、放置された課題があったら声かけをしていますね。

Backlog導入で生産性が5倍！10以上のプロジェクトを同時管理できるように

▶ チーム全体の生産性が向上したとのことですが、具体的にどのように変化しましたか？

導入前は、キャンペーンを2つ同時並行で進めるのがやっとでしたが、今では10以上のプロジェクトを同時に管理できるようになりました。Backlogがなければ、これほどの並行は無理だったと思います。情報を追うのに精一杯で考える時間がなく、人数が多いとメールで「宛先をどうするか？」のような余計な手間も発生してしまいますから。



▶ 同時並行するプロジェクト数が大幅に増やせた要因は何だと考えられますか？

要因は大きく3つあると考えています。1つ目は、進捗管理がしやすく、社外ユーザーもすぐ使いこなしてくれたこと。2つ目は、課題が探しやすいこと。メールのやり取りでは別の案件の話が混じったりして探しにくかったのですが、Backlogでは明確に整理され、検索も容易になりましたね。

3つ目に、情報の一元化。Backlogに情報が集約されることで、「探す」「誰がボールを持っているか思い出す」「進捗を思い出す」といった脳のリソースが解放されます。その結果、本来の業務に集中できるようになり、生産性が向上したと考えられます。

我々は社外のメンバーも含め、キャンペーン企画からお客様対応まで、ビジネスとして上流・下流までを一気通貫で行っている、いわゆるワンチーム。Backlogは、チーム全体の生産性を向上させるツールとしても機能しています。たとえば、お客様から問い合わせがあれば、スーパーバイザーからシステム開発者を担当に課題を割り当てるなど、他部署横断の体制がうまく作られています。このように、1つのプロジェクトに社内外の関係者が集い、進捗やコミュニケーションがオープンであるというのは、私たちの仕事のやり方にとても合っていると思いますね。

私たちの会社では、多くのパートナー企業と協業しており、Backlogの利用はもはや常識となっています。新しいパートナー企業が、Backlogでの進捗管理に応じてくださるかどうかは重要な要素の1つです。10社以上の企業と同時にプロジェクトを進める場合、Backlogの有無で効率が大きく変わります。売上や成果を上げる重点施策を行うチームにとって、Backlogの効果はとても大きいと言えると思います。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

※今後Backlogでは、「」で提供しておりましたナレッジ共有機能を「ドキュメント」に集約してまいります。
詳しくはこちらをご覧ください。

Backlog
導入事例12選
Case 3

経済産業省

https://backlog.com/ja/customers/case-study-meti/

経済産業省
Ministry of Economy, Trade and Industry

経済産業省が事務作業を3分の1に削減！行政手続オンライン化の一翼を担う

デジタル・トランスフォーメーション室の立ち上げ当初からBacklogを導入。70〜80ものプロジェクト管理をメールからBacklogに統一したことで、「事務作業の効率化」「リアルタイムでの情報共有が可能になった」「コミュニケーションコストの削減」などの効果が。効率的なプロジェクト管理が実現しました。



	Backlog導入前	Backlog導入後
タスク管理の効果	● ベンダーとのやり取りをメールで行い、コミュニケーションコストがかさんでいた ● 課題管理表をファイルでやり取りしていたためリアルタイムの情報共有が難しかった	● メールの情報整理や検索に費やす時間が劇的に減り事務作業の時間が3分の1まで減少 ● リアルタイムでの情報共有が可能になった
コミュニケーション面の効果	● プロトタイプ確認とシステム改修を重ねながら作り上げていくため、大量のレビューや修正作業が発生する度に打ち合わせを行っていた	● レビュー、修正点を課題に起票し、どのタスクに“誰がいつ”発言したかログが残る ● 対面の打ち合わせは必要最小限にしながらプロジェクトをスムーズに進行できるように

業種
官公庁

利用部門
デジタル・トランスフォーメーション室

「国民と行政、双方の生産性を抜本的に向上する」ことを目指す、経済産業省大臣官房デジタル・トランスフォーメーション室。

「Gビズフォーム」をはじめとした行政サービスのオンライン化、省内のデジタル化等、さまざまな行政のDXに取り組んでいる。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlogにプロジェクト管理を集約することで、事務作業時間が1/3に短縮！

▶ **Backlog導入によって抱えていた課題を解決できたとのことですが、詳しく教えていただけますか。**

7〜80にもおよぶプロジェクト管理をBacklogに統一し、得られた効果は主に3つです。1つ目は「事務作業の効率化」。Backlogでは立ち上げた課題、つまりタスクを軸に会話が進んでいくので、別のタスクに関する情報が混在することもなくなりました。

その結果、メールの情報整理や検索に費やす時間も劇的に減り、今まで費やしていた事務作業の時間が3分の1まで減少したのです。また、必要な情報を後から探す際にもタスクごとに検索できるため、今まで行っていた進捗報告やリソース確認の手間、不要な作業やタスクの重複確認などの業務がなくなりました。

2つ目に、「リアルタイムでの情報共有が可能になった」こと。DX室では、制度所管課室、そして外部ベンダー間で膨大なファイル数が飛び交うので、バージョン管理が煩雑になりがち。タスクに紐づけた状態でファイル情報を一元管理できるBacklogだからこそ、データの散逸・多重管理を防げます。

3つ目は、「コミュニケーションコストが削減できた」こと。Gビズフォームプロジェクトの場合では、ローコード開発ツールを活用して、DX室、制度所管課室、そして開発ベンダーとの3者間で合意を得ながら進めています。コミュニケーションを効率的に行えることで、短期間に設計・開発、テスト、リリースといったサイクルを回せました。

Backlogでは、レビュー、修正点を課題として立てられるので、どのタスクに“誰がいつ”発言したかログとして明確に残ります。そのおかげで対面の打ち合わせを必要最小限に抑えられました。コミュニケーションコストの削減はもちろんのこと、情報共有のタイムロスがなくなったのは、Backlogのおかげだと実感しています。

まだまだ利用規模拡大中！活用が広がって感じている効果

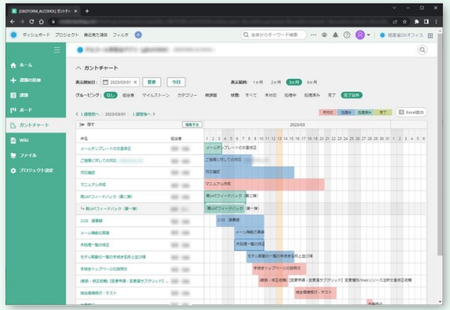
▶ **Backlog導入時からご活用の幅がかなり広がった理由は何だとお考えですか？**

Backlog自体の使いやすさはもちろんですが、プロジェクトやユーザー数がどれだけ増えても費用が変わらない月額固定の料金体系が大きいと思います。DX室のプロジェクトでは、関わる方の出入りが頻繁にあり、複数プロジェクトが同時並行で進むため、ユーザー数が大きく変動します。そのため、私たちのように「導入後、プロジェクトやユーザー数がどれくらい増えるかわからない」といったケースでは、ユーザーライセンスによらない料金体系は非常に嬉しいですね。一度導入すれば費用面のことを一切気にせず、業務に集中できる。Backlogがあったからこそ開発の本数をここまで増やせたのだと感じています。

▶ **Backlog導入のメリットはどういった点だとお考えでしょうか。**

経産省ではコロナ禍以降さらにテレワークする職員が増え、オンライン会議が増加しています。時間や場所を選ばず参加できるオンライン会議はメリットもある一方、対面で行うよりも丁寧な情報共有が求められるため、会議のやり方にも工夫が必要です。DXチームのオンライン会議の際、Backlogのガントチャートを画面共有することで、必要な情報をリアルタイムに確認しながら仕事を進めています。

チームメンバーが一堂に会する場で、必要に応じて直接Backlog上のタスクを完了することもできますし、その瞬間をメンバー全員が確認しながら進められるため、わざわざ会議資料を作成する必要もありません。つまり、Backlogというツールがそのまま会議資料になるんです。これは業務効率化における大きなメリットだと思いますね。



タスクを登録していくことでガントチャートができるためプロジェクトの進捗が簡単に可視化できる

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 4

株式会社ふくおかフィナンシャルグループ

https://backlog.com/ja/customers/case-study-ffg/

一歩先を行く発想で、
地域に真のゆたかさを。

BacklogとNulab Passが金融DXの一助に
～ふくおかフィナンシャルグループDX戦略の秘訣とは～

DX推進本部で、開発チームのタスク管理やを利用した手順書などナレッジの蓄積を中心に、ファイルのアーカイブ管理や部署横断での情報共有など、多岐にわたりBacklogを運用しています。さらにNulab Pass導入で、セキュリティとガバナンスの強化を実現。DX推進に大きく寄与しました。



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
運用面の効果	● OSS（オープンソースソフトウェア）や他サービスを検討も、使いやすさやサポート体制に不安 ● タスク管理と部門横断の情報共有を実現したい	● レクチャーやマニュアルいらずで誰でもすぐ使えるUI ● 一部の機密情報を除きBacklogに情報を集約することで、情報共有の負荷が大幅に軽減、部署間のコミュニケーションもスムーズに
セキュリティ面の効果	● 外部との情報共有におけるセキュリティ及び監査性に課題があった ● インシデント発生に備え、監査ログの取得体制を万全に整えたい	● BacklogはIP制限が簡単にかけられる ● Nulab Pass導入で、監査性が向上し、セキュリティとガバナンスの強化を実現

業種
金融

利用部門
システム開発

地域金融機関としては国内で最大規模を誇る、株式会社ふくおかフィナンシャルグループ。

既存銀行サービスに加え、日本初のデジタルバンクである「みんなの銀行」や、口座振替をWebで受付するサービス「こうふりネット」などのデジタルサービスを展開している。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

※今後Backlogでは、「」で提供しておりましたナレッジ共有機能を「ドキュメント」に集約してまいります。
詳しくはこちらをご覧ください。

部署間の敷居を下げる、Backlogの巻き込み力

▶ Backlogの具体的な活用法を教えていただけますか？

スクラム開発チームではとくに「ボード」機能をよく利用しています。メンバーのタスク進捗や優先度がひと目でわかるので、とても便利ですね。状態のカスタマイズをすることで、進捗や優先度、バグの把握など幅広いタスクを可視化できますし、誰もが最新情報をわかりやすく把握・管理できるので重宝しています。他部署での活用も広まっていて、Backlogの利用ユーザー数は毎年50～100名規模で増えているんですよ。

Backlogに情報が一元化され、プロジェクトに関わるメンバー全員が同じタスクや情報を取得可能になったことに加え、圧倒的な使いやすさだと考えています。ユーザー数に上限がないので、自由にメンバーが参加できる環境を用意できていることも大きいと思います。その結果、部署間の敷居が下がり、他部署を気軽に巻き込みやすい文化が醸成できたのだと実感しています。



状態のカスタマイズをすることで、さまざまなタスクを一覧で把握できる

▶ Backlog導入による情報共有の効率化は、DXの加速に影響しましたか？

当行におけるDX推進への寄与度は非常に大きいですね。部署を横断したプロジェクトの進行管理に活用していますし、他部署においてもBacklogは自然と浸透しています。

実は導入前の課題の一つに、ファイル共有の煩雑さがありました。以前の環境では部署ごとにフォルダの閲覧制限をかけていたため、他部署にパスを送っても閲覧することができません。そこで、共有が必要な際はメールで資料を送るのですが、パスワードが5分後に届くなど、閲覧するまでに時間がかかってしまう。しかし現在は、Backlogのパスをチャットツールで伝えるだけで済むようになりました。

一部の機密情報を除いて、プロジェクトに関する情報共有はBacklogに集約することで、部署横断での情報・資料共有の負荷が格段に減っています。社内コミュニケーションもスムーズになりました。

Nulab Pass導入の目的は、セキュリティ強化と監査ログの取得

▶ Nulab Pass導入のきっかけはどのようなことでしたか？

理由は2つあります。1つめは、外部ベンダーとの共同開発を始めるにあたり、さらにセキュリティを高める必要があったこと。Backlogに集約されている情報には、大切なデータが多く含まれています。DX推進本部や関係部署、外部ベンダーなど多くのメンバーが関わるプロジェクトで利用するには、セキュリティの強化が必須でした。





2つめは、監査ログの取得体制を万全に整えたかったことです。Nulab Pass導入前にも、監査目的でアクセスログを定期的に取得していたのですが、ユーザーの動きをきちんと追えないケース、つまり操作ログをすぐに追えないことが稀に発生していました。監査ログは、問題が発生した際の原因究明や解消に、非常に重要な手段です。また、権限のない機密情報へのアクセスなど、不正行為の抑止力にもなります。

Nulab Passの監査ログは、「だれが・いつ・どこから・何をしたのか」といった操作情報を即時ダウンロードできます。ダウンロードしたログは時系列で記録されており、過去にさかのぼって確認できますので非常に心強い。Nulab Passを導入することでBacklog内の課題をはじめ、ファイルやなどにおけるアクティビティログを網羅することができますので、大変重宝しています。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

※今後Backlogでは、「」で提供しておりましたナレッジ共有機能を「ドキュメント」に集約してまいります。
詳しくはこちらをご覧ください。

Backlog
導入事例12選
Case 5

株式会社横浜国際平和会議場（パシフィコ横浜）

https://backlog.com/ja/customers/case-study-pacifico-2/

運用コストを40分の1に削減した、大規模Webリニューアルプロジェクトにバックログを活用

パシフィコ横浜の大規模Webリニューアルプロジェクトにバックログを利用。初の完全内製化、さらにチーム5名のうちIT業務経験者は1名のみという布陣でスタートしたビッグプロジェクトを見事に成功させています。さらに年間運用コストが以前と比べて40分の1にダウン、という驚異的なコスト削減を実現しました。



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
プロジェクト管理の効果	● 1,000ページにおよぶ公式Webサイトのリニューアルを内製で進行 ● チーム5名のうち、IT業務経験者は1名のみという布陣でプロジェクトを開始	● 誰もが状況把握できる環境を確立、社内ノウハウの共有も効果的に行えた ● タスク漏れや遅延が発生せず目標としていた期間でリリースできた
タスク管理の効果	● テレワーク対応時のコミュニケーションを迅速にしたい ● 個人に依存していたタスク管理を見える化したい	● 在宅での進行、不在時のフォローがしやすく、時間と場所にとらわれないタスク管理が可能になった ● タスクの振り分けがしやすい

業種
会議施設、展示場運営

利用部門
運営管理

国内最大級のMICE※施設『パシフィコ横浜』を運営する株式会社横浜国際平和会議場。

イベント誘致や企業・団体営業、主催者を支えるコーディネーター業務を主軸に、自主イベントや顧客向けサービスの企画、施設管理など多彩な事業を展開している。

※　MICE：国際会議、展示会といった多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlogで誰もが状況把握できる環境を確立。スピードを速め手戻りを減らす、アジャイル開発を推進

▶ Backlog導入から公式Webサイトリニューアルプロジェクトでの活用に至った経緯を伺えますか？

2020年にBacklogを導入して以降、社内で業務のデジタル化が徐々に浸透しつつあります。導入当初はコロナ禍の混乱や環境の変化が続く中で、我々のチームでは「誰が・何を・いつまでに」を可視化できるよう、Backlogを活用した業務の見える化に取り組んでいました。

2022年にはBacklogをひと目見れば、各自の状況が誰もが把握できる環境が確立できたと思います。在宅勤務時においても、業務がスムーズに行えるようになったことから、「うまく回っているな」と実感することが多くなってきました。

2023年になり、営業部門でBacklogを活用していたメンバーが新たに加わり、現在の5人体制になったわけですが、この頃にはチーム内すべての業務をBacklogで管理できるようになっていました。その中でWebサイトリニューアルのプロジェクトが立ち上がったので、Backlogで管理することはある意味、必然の流れでした。

まずは「どのようなサイトを目指していくのか」を探るために、社内のヒアリングから始めました。社内の各部署に赴き、要望や課題を吸い上げました。プロジェクトリーダーの松原が全要望に対して「これはすぐにやりましょう」「これは次のフェーズでやりましょう」と一つひとつ返答し、優先度の高いものからBacklogに課題起票するといったやり方で進めていきました。

しかし、本プロジェクトは外出自粛要請の解除や「ポストコロナ社会」といった生活環境の変化を受け、多くの催事が戻ってくることが予想される中で動き出したこともあり、時間的な猶予がありませんでした。

▶ スピード感を重視してプロジェクトを進める必要があったわけですね。

スピード感をもって一気に進行するような場合に懸念されるのは、やはり社内のハレーションや手戻りの増加です。そのため、社内全体でのイメージ共有、認識のすり合わせを重視しつつ、やり取りを地道に行っていたのです。スピードと進め方の両面から、臨機応変に対応できる“完全内製化でのアジャイル方式”が最適解だったのです。



Backlog活用で感じた効果。属人化を防ぎ、メンバー不在時のフォローがしやすい

▶ Backlogの活用方法と、効果を感じた部分があれば教えてください。

リニューアル対象のページは、まず課題として起票します。個々のページに関する作業内容や情報をリアルタイムで集約・ストックして共有したり、タスク管理やチームメンバーの進捗確認にも活用しました。もともと1,000ページ以上あったWebサイトは約200ページまで削減しましたが、Backlogのおかげでタスク漏れや遅延などは発生せずスムーズに進行できました。作業も属人化することなく分担で行うことができる仕組みとなり、作業工数も削減できています。

目標としていた4か月でリリースできたことも大きな成果ですね。Backlogの利便性は、タスクの振り分けや在宅での進行、不在時のフォローがしやすい点にあります。しかもプロジェクト管理だけではなく、社内ノウハウの共有や外部ユーザーの招待も効果的に行える。最初はBacklogでのタスク管理が不慣れであったメンバーですが、少しずつ「場所」「時間」にとらわれない働き方、タスク管理ができるようになりました。

もともと、従来のやり方を変えることに対する抵抗感というのは、どうしてもあると思いますが、コロナ禍での状況を踏まえて、Backlogをはじめとした ITツールを駆使しながらリモートでプロジェクトに取り組む環境を整えることができた――。この成功体験から、新しいツールを積極的に採り入れる文化が広まりつつあります。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 6

株式会社デジタルキューブ

https://backlog.com/ja/customers/case-study-digitalcube/

DigitalCube

Backlogは単なるタスク管理ツールではない！

チームの連携を深め、プロジェクトを成功に導く“シン・Backlog運用術”

全社員がフルリモートで働くデジタルキューブでは、BacklogとCacoo、Nulab Passを活用し、チームワークと業務効率の向上を実現しています。同社では「バックログスイーパー（チーム全体のタスク管理をサポートし、チームの仕事を前進させる人）」が、社内のタスク管理を徹底し、社内外のチームプロジェクトを大きく前進させました。



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
タスク管理の効果	● タスクの完了条件や作業範囲に認識ズレが生じやすい	● タスクや情報の粒度を統一し、社内外で共通認識を築いている ● 『いつ・なぜ・誰が・何を・どのように・どうするか』を明らかにすること＆成果物や完了条件を明確にすることがタスク管理のポイント
チームワークマネジメントの効果	● リモートワークを快適に効果的にするためには仕事内容の『見える化』が重要 ● メンバー全員が共通の認識を持つことで初めてワンチームになれる	● 業務の量・内容・進捗などすべてが可視化され、チームメンバー間の連携も向上 ● 単なるタスク管理ツールではなく、チーム全体のコミュニケーション＋タスク管理のインフラ

業種
システム開発

利用部門
システム開発／コンサルティング

兵庫県神戸市を拠点に、AWS をベースとしたホスティング事業・自社プロダクト事業、WordPressでの受託開発/コンサルティング事業をてがける株式会社デジタルキューブ。『Amimoto（アミモト）』『Shifter（シフター）』『FinanScope（ファイナンスコープ）』などのサービスを提供している。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

バックログスイーパーが仕掛ける“シン・Backlog運用術”

▶ 御社ではBacklogを積極的に活用されているそうですが、社内での役割と具体的な使い方を教えてください。

当社ではコロナ禍以前から全社員がリモートワークを実施しており、社内のタスク管理はもちろん、クライアントやパートナーとのやり取りやタスク管理にBacklogを活用しています。私自身は人材開発と採用を担当していますが、この業務においてもBacklogは必須のツールです。

チーム全体のタスクの進行管理はもちろん、期限切れのタスクや進捗が遅れているタスクを洗い出したり、新入社員に使い方をオンボーディングするなど、チームの生産性向上を図るとともにBacklogの運用を促進する役割も担っています。



▶ まさに「バックログスイーパー」ですね！Backlogを選定した理由は何だったのでしょうか。

私が入社する前からBacklog、Cacooは導入されていたのですが、Backlogによって、業務の量・内容・進捗などすべてが可視化され、誰が何をしているのかが見えるのが理由だと思います。当社では創業以来フルリモートワークを採り入れていますが、リモートワークを快適に効果的にするためには『見える化』が重要なポイントです。『見える化』を実現する上で、Backlogはなくてはならないツールですね。

▶ リモートワークでは「タスクの見える化」が必要ということでしょうか。

それもありますが、我々はBacklogを単なるタスク管理ツールとして捉えていません。チーム全体のコミュニケーション＋タスク管理のインフラとして、プロジェクトの可視化と効率化、そしてチーム力向上を図っています。

具体的にはクライアントとの共同プロジェクトから、社内のタスク管理など、あらゆる業務においてBacklogを活用することで、チームワーク力を高める。社内外のメンバー全員が共通の目標に向かってシナジー効果を発揮できる環境を整えています。

チームの連携を深めるBacklog運用のコツ

▶ うまく運用していくためのコツは何かあるのでしょうか。

タスクや情報の粒度を統一することでしょうか。たとえば、『カレーを作る』というプロジェクトがあるとしますよね。すると、『カレーを作る』というタスク1つにまとめる人もいれば、『玉ねぎを買う』『人参を買う』といった細かいタスクに分ける人も出てくるわけです。このようにタスクの粒度が揃わないプロジェクトは、なかなかうまくいかないことは想像できるかと思います。

▶ タスクの粒度にバラつきがあるとスムーズな進行は難しい、と。

タスクの完了条件や作業範囲などは、認識のズレが生まれやすく、プロジェクトの遅延リスクにつながる恐れもありますよね。そのため、当社ではバックログスイーパーが中心となり、チケット運用の考え方や概念、そしてタスクの粒度に関して、社内メンバーからクライアントまで含めて、全体で共通認識を築くようにしています。

▶ チーム全員が共通の認識を持つことが重要なのですね。

はい。そして、Backlogを単なるタスク管理ツールとしてではなく、チームの連携を深め、プロジェクトを成功に導くツールにする。そうなれば、チームメンバーは自分の役割を理解し、責任を持って仕事に取り組むことができるようになります。すでにBacklogによってタスクは『見える化』されているのですから、お互いの進捗を共有することで、協力し合う体制が万全になるというわけです。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 7

株式会社primeNumber

https://backlog.com/ja/customers/case-study-primenumber/

Backlogの全社展開でチームの協働を促進。
会議を変え、タスク管理の工数も変えたBacklog活用法

社内外の多くのメンバーが携わる数々のプロジェクトを効率的に推進するため、Backlogを全社的に導入しました。チャットやExcelに情報が点在して各プロジェクトの状況が見えづらかった状況から、Backlogにすべての情報を集約。プロジェクトごとの進捗、メンバーのタスク量、状態や期日が可視化されたことで、情報共有や進捗管理にかかる工数の大幅な削減につながりました。



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
タスク管理の効果	● ExcelやGoogleスプレッドシートなどに情報が点在してプロジェクトの状況が見えづらかった ● Slackでの業務依頼は、やり取りが埋もれて経緯把握に時間がかかっていた	● Backlogへの情報集約でタスク量や進捗が可視化され、情報共有や進捗管理の工数が大幅に減った ● Slackから直接課題登録できるため、作業フローを大きく変えずにすんだ
コスト面での効果	● 従量課金制だとユーザーを増やしたいときにコストが発生する	● Backlogはユーザーが増えてもコストは変わらない※ため、全社展開する上で大きな利点だった ● ライセンス購入などの社内申請も不要で作業工数が減った ※料金プランにより異なります

業種
IT・通信／システム開発／コンサルティング

利用部門
情報システム

株式会社primeNumberでは、大きく3つの事業を展開。

データ基盤の総合支援サービス「TROCCO®」、データの発見・理解・活用を促進するデータカタログサービス「COMETA」の開発・運営、そしてデータテクノロジー領域における課題解決を目指したコンサルティングサービスを提供している。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

社内外のメンバーが協働するプロジェクトが複数進行する中で感じた、Backlog導入の大きなメリット

▶ 御社では、Backlogをどのように活用されていますか？

主な用途は、各部門で発生するさまざまなプロジェクトのタスク管理です。タスクの内容、担当者、現在のステータスなどを管理し情報を共有するのに活用しています。たとえば私たちの部門では、システム改修などのプロジェクトにおいて修正内容や実施の流れ、期限などを管理しています。

▶ プロジェクト管理ツールが統一されていなかった状態から、どのようにBacklogの導入に至ったのでしょうか？

Backlogの選定には、複数の理由があります。まず、全社導入される前から一部の部署ですでに使われており、社内での利用実績があったことが大きな要因です。利用していた社員からも「使いやすい」との声を聞いていたため、安心感が持てましたね。

さらに、社内外の多様なメンバーが協働するプロジェクトが同時並行で走る中、アカウントの増加にも柔軟に対応できることが魅力的でした。Backlogは従量課金制ではないため、ユーザー数が増えてもコストが変わりません※。これは全社展開を検討する上で大きな利点でした。

金銭面だけでなく、ライセンスの購入申請や見積もり取得などの作業が不要になるため、作業工数も大きく削減できます。毎月新メンバーが入社する中、この点は非常に助かっています。

※ 料金プランにより異なります

BacklogとSlackを連携。従来の作業フローを変えずに社内浸透を促進

▶ Backlogの全社展開にあたり、ツール浸透のために工夫された点があれば教えてください。

まず、BacklogとSlackを連携し、Slack上からBacklogの課題登録ができるようにしました。これによって、社員はSlackを使うという従来の作業フローを大きく変えることなく、タスクの入力が可能となります。

また、Backlogの操作性が直感的でわかりやすいこともあり、初心者でもすぐに使い始められる点は、ツールの活用浸透を後押ししてくれたと感じます。実際、「Backlogの使い方がわからない」という社内からの問い合わせはほとんどありません。社外のゲストユーザーから質問されるような場合も、担当者から回答できているのだと思います。

また、私たちの部門内では課題のテンプレートを用意し、入力すべき項目をわかりやすくしました。課題を登録するユーザーが迷わずに必要な情報を入力できるので、非常に便利です。



部門で利用している課題のテンプレート

すべての情報がBacklog上に集約され、チームへの情報共有やプロジェクトの管理工数が劇的に削減

▶ Backlogを導入して感じられた効果についてお聞かせください。

プロジェクトごとの進捗、メンバーのタスク量、状態や期日が可視化されたことで、情報共有や進捗管理にかかる工数の大幅な削減につながりました。

以前は、都度プロジェクトメンバーに確認しないと正確な情報が得られない状況でした。しかし、Backlogにすべての情報を集約できたので「誰が何を担当しているか」が一目で把握できるようになったんです。

また、タスクが発生したら必ずBacklogに起票するルールを設けたことで、タスクの漏れや大幅な期日超過も減少しました。定例会議での進捗管理も、Backlogを見ながら行っています。

▶ 定例会議の進め方にも変化がありましたか？

はい、会議で議論される内容が大きく変わりました。Backlog導入前は、プロジェクトの状況共有から始めていたため、その分ディスカッションの時間が限られていました。

今はBacklogを見れば状況がすぐに把握できるので、詳細を詰めたり業務上の相談をしたりと、より本質的な議論に時間を割けるようになったんです。

さらに、複数のプロジェクトに関わるマネジメント層の立場としては、Backlog上でプロジェクトをまたいだ検索もしやすく助かっています。ガントチャートやプロジェクト内の課題一覧など、Backlogではさまざまな表示方法ができるので、目的に合わせて使い分けています。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 8

株式会社スターフライヤー

https://backlog.com/ja/customers/case-study-starflyer/

脱メールで業務効率化！スターフライヤーのパイロット・客室乗務員・整備士のBacklog活用術

マーケティング部や営業部に加え、パイロット、客室乗務員、整備士などバラエティに富んだチーム構成で公式SNSを運営。それぞれの勤務体制が異なる中、部署間のコミュニケーションをメールからBacklogに移行し、コミュニケーションコストが大きく低下。月単位で換算すると約5時間×20人の工数削減に成功しました。



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
コミュニケーション面の効果	● 多くの部署や外部委託先との連絡も含め、膨大な数のメールが飛び交い、確認や検索作業に時間を費やしていた ● 専用PCを持たない現場メンバーは、共有PCがある場所に移動してタスク確認していた	● タスクと担当者と期日が明確になり業務スピードが大幅UP、月単位で5時間×20人の工数を削減 ● モバイルアプリで現場メンバーもタスク確認や返答でき、コミュニケーションコストが下がった
運用面の効果	● SNS投稿素材へのフィードバックが重なり、最新ファイルがどれかわからなくなっていた ● メール内で複数のタスクが重なり「最終的に誰が何をするのかがわからない」現象が起こっていた	● Backlogの共有ファイルに集約し、素材のバージョン管理が簡単に ● 親子課題が便利。課題対応中に担当者の違うタスクが生じれば子課題を作り、1課題に対して1テーマの会話ができる

業種
航空

利用部門
公式SNSの運営プロジェクトメンバー（マーケティング、営業、パイロット、客室乗務員、整備士、グランドスタッフ）

株式会社スターフライヤーは「感動のあるエアライン」を企業理念に、お客様へのホスピタリティを重視した航空輸送サービスを提供する航空会社。

新たな顧客接点として、社員が部署の垣根を超えて自社の魅力を公式SNSで発信している。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

ツールを浸透させるために行ったのは丁寧で優しいマニュアルづくり

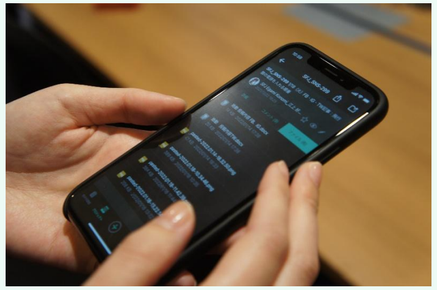
▶ どのようにBacklogに出会ったのですか？

SNS委員会の中心メンバーが当時Webサイトデザインの外注先とのやり取りで使用していたのがBacklogでした。メールとは違い、Backlogはカジュアルに進捗確認ができることにとても魅力を感じていました。

実際にコミュニケーションを効率化できた実績もあったので「Webサイトだけでなく、社内の他部署を巻き込むプロジェクトで利用しても絶対に便利！」と思い、導入を推進しました。

▶ 現場の方々はどのようにBacklogを確認しているのですか？

メールからBacklogに移行したことで大きく変わったことの1つがこれです！Backlogはブラウザだけでなくスマートフォンアプリも提供しているので、パイロットや客室乗務員、整備士など専用PCがないメンバーが各自のスマートフォンから返信できるようになりました。これによって現場メンバーのコミュニケーションコストは大きく削減できていると思います。



月単位、5時間×20人の工数削減！課題対応中に生じた小さなタスクも担当者と期日を明確にすることで業務スピードが大幅UP

▶ よく使う機能はありますか？

親子課題機能にはとても助けられています。

メールは複数のタスクにまたがったコミュニケーションが、1つのメッセージへの返信で積み重なりがちで「最終的には誰が何をするのかがわからない」という現象がよく起こっていました。それがBacklogでは1つの課題を起票した後でも担当者の違うタスクが生じれば、そこに子課題を作って担当者と期限を設定できます。

1課題に対して1テーマの会話が原則なので、目的とする情報を探して脱線した会話の中をさかのぼるようなことはありません。

具体例を挙げると『2022年_夏期_売り出し』という親課題があり、そこに『夏期売り出し_Webページ更新作業』や『夏期売り出し_運賃策定』などの子課題を作成しています。メールを利用していたときには、Webページの話と運賃の話が同じメールへの返信上で行われ、混乱していました。

▶ 投稿する画像やテキストなど、素材のバージョン管理に課題を抱えていたとのことですが、その点はBacklog導入で変化がありましたか？

現在はSNSに投稿する画像素材の管理にBacklogのファイル機能を利用しています。Backlogに素材を集約することで修正履歴の管理を容易にできるようになりました。確認を依頼してから時間が経ってしまった場合にもメールのように過去のやり取りから添付ファイルを探すような手間はなく、共有ファイルのリンクを送信することですぐに同じファイルを見ることができます。

またWebサイトの更新を担当している部署への依頼も、以前はExcelで依頼書を作成していましたが今ではBacklogを活用しています。また、Backlogの予定時間と実績時間を詳細に記入することで工数管理もできています。10時間の予定で依頼していたタスクに実際は30時間かかった、というような工数の予実管理をすることで依頼内容の最適化に役立っています。

予定と実績など課題に付随する情報はCSVやExcelで出力することもできるので、月次や四半期で数字を確認することで、工数を圧迫している依頼を割り出して対策を検討する、などのネクストアクションにもつながっています。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 9

株式会社オーディオストック

https://backlog.com/ja/customers/case-study-audiostock/

「JBUG」がBacklog導入の決め手に。
ユーザーコミュニティはリアルな活用方法や解決策を得る機会

Backlog導入の決め手は、ユーザーコミュニティ「JBUG」で他社のリアルな活用事例を聞けたこと。
「使い方は調べればある程度わかるけれども、他社の具体的なエピソードはイメージしやすく、自社に置き換えて考えられるのが良いところ」と話します。

>> JBUGの詳細・参加はこちら



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
タスク管理の効果	● 開発部への案件依頼を抜け漏れなく管理、把握したい ● 質問や相談～開発の過程で発生する会話や情報を集約したい ● チャットでのタスク管理では対応の抜け漏れが発生	● 質問や相談内容をBacklog上で課題として起票し、課題内で関係者と開発内容のすり合わせできるように ● タスクに紐づけてコメントし合える仕様が業務にマッチしていた
JBUGの効果	● ユーザーコミュニティ「JBUG（ジェイバグ）」で他社の活用事例を聞けた	● 他社の具体的なエピソードがBacklog導入の大きな決め手に ● 他社の使い方やタスク管理方法、マネジメントの工夫など、学びたかったトピックから知らない情報まで幅広く吸収できる場

業種
IT・通信／システム開発

利用部門
システム開発

株式会社オーディオストックは、動画や番組に使えるBGMや効果音など、商用利用も可能な90万点以上の音楽作品を販売するサービス「Audiostock」を運営。サービスを通じて、音楽クリエイターと音源を求めるクライアントをつなぎ、クリエイターの持続的な創作活動をサポートすることをミッションに掲げている。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

チャットツールだけのタスク管理に限界を感じ、Backlogを導入

▶ Backlog導入前はどのようにタスク管理をされていたのでしょうか。

導入前、開発部ではチャットツールで他部署からの依頼を受け付けていたのですが、タスク管理の難しさに直面していました。複数のトークルームから依頼が来るため、どこで会話していたのかわからなくなってしまい、対応が漏れてしまうケースが発生していたのです。

一時は開発部への依頼専用のトークルームを作成して集約を試みましたが、依頼数が多くどんどんコメントが流れていってしまい、チャットだけの運用に限界を感じるようになりました。

このような問題を解消するため、Backlogの導入を決めたのが2019年でした。

▶ Backlogを選んだポイントは何でしたか？

Backlogでは、タスクの数や進捗を管理できるだけでなく、それぞれの課題の中でコメントのやり取りができる点に魅力を感じました。

他部署からは、要望として固まり切っていない状態で相談されることもありますし、「こういうことを実現したいのですか、可能ですか？」といった質問からプロジェクトが始まる場面も少なくありません。
Backlogで質問や相談内容を課題として起票すれば、その課題の中で関係者と開発内容のすり合わせができて便利です。タスクに紐づけてコメントをし合える仕様が弊社の業務の進め方にマッチしていました。ほぼBacklog一択でしたね。

▶ CacooとNulab Passもあわせてご利用いただいています。

Backlogの正式導入とともに、ヌーラボが提供するクラウド作図ツールCacooの利用も開始しました。Cacooはインフラチームがインフラの構成図を描いたり、マーケティングの担当者が企画案の作成をしたりするのに活用しています。

2年ほど前にはNulab Passも追加で契約しました。いちユーザー目線では、シングルサインオンができるのは効率的だと感じています。情シス担当者の立場でも、セキュリティの観点で安心材料だったようです。

JBUGで得た出会いと学びが、Backlog活用の幅を広げてくれた

▶ Backlogとの接点がJBUG（ジェイバグ：Japan Backlog User Group）だったのですね。

実はBacklogの導入は、JBUGをはじめコミュニティで他社のリアルな活用事例を聞けたことが決め手として大きかったです。JBUGに参加していなくてもBacklogの存在は知り得たとは思いますが、自分の会社に導入して活用するところまではいかなかったかもしれません。

Backlogに限らずITツールの使い方は調べればある程度わかるのですが、実際に皆さんがどのように使っているのか、具体的なエピソードとして聞くとイメージしやすく、自社に置き換えて考えられるのが良いところだと思います。ちなみに、JBUG岡山とJBUG広島でオンライン共同開催した際は、私も登壇者として自社でのBacklog活用事例をお話しさせていただきました。

▶ ユーザーコミュニティや有志の勉強会に参加する意義や価値はどのようなものがありますか？

まず、横のつながりができる点が大きなメリットです。社内に閉じず、さまざまな会社・職種の人たちと交流する機会が増えました。困ったときにコミュニティで知り合った人に相談すれば、何かしらの解決策を得られたり、事情に詳しい人を紹介してもらえたりします。

また、知らない世界を知ることができるのもコミュニティの価値だと感じます。自分の見ている世界は意外と狭いものです。視野を広げるには、勉強会やイベントでいろいろな人の話を聞いて「他者の視点」を得るのが効果的だと考えます。



© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 10

株式会社 ADX Consulting

https://backlog.com/ja/customers/customers-case-study-adxc/

Salesforceとの連携で問い合わせ管理をスムーズに！バックオフィス業務も効率化

CRM（顧客関係管理）事業部立ち上げと同時にBacklogを導入。自社で利用しているSalesforceとBacklogを連携させることで、問い合わせ管理対応における社内の連携を強化しました。さらにバックオフィス業務や営業事務など、さまざまな部署で業務効率を大きく向上させています。



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
問い合わせ管理の効果	● 顧客からの問い合わせを全社で確認できる場所がなく、都度チャットやオンラインミーティングなどで社内への二次問い合わせを行っていた	● Salesforce上からBacklogの課題を起票できるよう連携 ● エスカレーションが必要な問い合わせがあった場合はBacklogに起票するフローを確立し、スムーズな社内連携を実現
バックオフィス業務の効果	● 社員が増えたことによりバックオフィスへの問い合わせが増え、管理しきれなくなっていた ● チャットでは過去の投稿が流れて進捗管理できない	● 社内からバックオフィスへの問い合わせをBacklogに集約し、1日約1時間かかっていた確認作業をゼロに ● 課題のステータスや担当者が可視化され対応漏れがなくなった

業種
コンサルティング

利用部門
全社で利用

ADX ConsultingはERPパッケージの導入支援などを通じてクライアントのDX推進に取り組むコンサルティング企業。

CRM事業部ではSalesforceや各種ツールの導入・活用による営業支援コンサルティングや、Salesforceと連携して帳票出力が可能な「PlainReport(プレーンレポート)」を開発・展開。

掲載内容は2022年8月当時のものです。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

問い合わせ対応における社内の連携がスムーズに

▶ Backlogの具体的な活用場面を教えてください。

部内では、プロジェクトにおけるタスク管理のほか、主にお客様からのお問い合わせ対応の場面でBacklogを活用しています。もともと、自社のSalesforce環境を利用してフォーム経由でお問い合わせを受けていたのですが、Backlogを連携させて案件管理ができれば、より便利になると考えたのです。

お客様からのお問い合わせを受けた際「詳しいメンバーに確認したい」という場面はどこの会社でも起こり得ますよね。弊社でも、技術に詳しい社内のコンサルタントやエンジニアへのエスカレーションが必要なお問い合わせが多くあります。しかし、必ずしも相談先のメンバーがSalesforceを使っているとは限りません。問い合わせを受けた事業部のメンバーが、都度チャットやオンラインミーティングなどで二次問い合わせを行う、といった無駄をなくすために導入したのがBacklogです。

社内確認が必要なお問い合わせについては、Salesforce上からBacklogの課題を起票できるようにすることで、お問い合わせ内容が社内に簡単に拡散され、適切な回答者からのアドバイスを迅速に得られる環境が作られました。

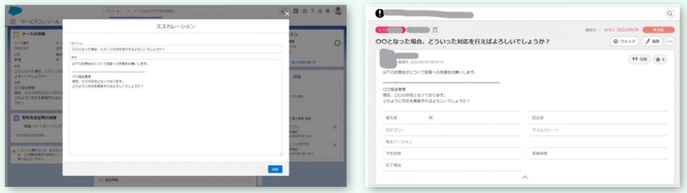
バックオフィス業務にも導入、1日1時間のタスク確認作業を0分に！

▶ Backlogに移行したことで、どのようなメリットがありましたか？

導入前は、チャット内の投稿をさかのぼって、対応済みかどうかを確認する作業が1日に30分から1時間も発生していました。その点、Backlogでは未対応、処理中、完了といった課題のステータスが一目瞭然です。確認作業の時間は、ほぼゼロになりました。

また、課題テンプレートを用意しておけるのも助かっています。必要な項目がきちんと入力された状態で依頼が来るので、不足している情報を依頼者に確認する手間がなくなりました。Backlogでは各課題のステータスや担当者が見える化され、現在誰がボールを持っているのかがわかりやすいのも特長です。おかげで課題の対応漏れがなくなり、とても助かっています。

また、Backlogで管理するようになったことでどんな依頼が多いのか、各依頼に対してどれくらいの時間がかかるのか、が可視化されました。よくある質問をQ&Aに整理したことで、問い合わせ自体の削減にもつながっています。



Salesforceの画面上でBacklogの課題を起票すると
Backlog側で新しい課題が作成される

営業事務業務でも活用、APIを積極的に利用してさらなる展開も

▶ Backlogの活用について、今後の展望はありますか？

バックオフィスの問い合わせにBacklogを活用したことで、全社でBacklogの認知が拡大しました。それによって社内の他業務でもBacklogを活用したら効率化できるのではないか、という声が上がるようになっています。

また、BacklogのAPIを活用してSalesforceに来るお問い合わせのエスカレーションをスムーズにしたように、お客様側にも便利な機能を追加できないかと検討を進めています。具体的には、Salesforceからガントチャートや課題の表示が可能となるような仕組みを考えています。社内だけでなく、お客様との情報共有がスムーズになるようにBacklogを活用していきたいです。

▶ リモートワークを基本としているからこそ、お客様との情報共有時の工夫が大切なんですね。

コンサルタントという職種柄、議論の見える化をして図解でわかりやすく伝える必要があります。そこはBacklogだけではなかなかカバーできないので、同じヌーラボサービスの作図ツールCacooを利用しています。Cacooで作成した図を画面共有でお見せしたり、図のリンクをお客様に共有して一緒に編集しながら会議を行っています。口頭や文字だけでなく図の共有ができることで、細かなニュアンスの調整や認識合わせがオンライン会議でも簡単にできるようになりました。

BacklogとCacooを併用することで、共通のアカウントでログインができるなどのメリットも感じています。Cacooで描画した図を、Backlogに埋め込んだ際には、図にリアルタイムで更新が反映される点も便利ですね。

掲載内容は2022年8月当時のものです。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Fukuoka Growth Next

https://backlog.com/ja/customers/case-study-fukuoka-growth-next/

福岡発！スタートアップ支援施設の事務局で、タスク管理にBacklogを活用し業務を効率化

Fukuoka Growth Next（以下FGN）では、スタートアップで働くエンジニアやデザイナー向けのイベント・セミナーの進行管理にBacklogを活用。スケジュールの確認や、どの担当者が何をいつまでにするかといった「役割」と「期限」を明確にすることなど、Backlogはさまざまなプロジェクト進行の力強い味方になっています。



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
タスク管理の効果	● 共通のタスク管理ツールがないと情報が個人の元で埋もれたり属人化のリスクがある ● イベントプロジェクトは、企画や準備に始まり細々としたタスクや担当の割り振りなど管理工数が煩雑	● 全体の業務や状況が可視化され、抜け漏れがなくなった ● ガントチャートとボード機能を活用してタスク管理を効率化。全体像が見えやすく進捗を客観的に把握できる
運用面の効果	● さまざまな組織からメンバーが集まるFGNで、タスク管理やコミュニケーションのツールが統一されていなかった ● ITツールはユーザーが増える度に社内承認など事務作業の手間がある	● 高度な機能を持ちながら、誰にでも手軽に使えるツールであるBacklogを採用 ● 人数が増えても料金が変わらず、経済的＆事務作業が不要

業種
スタートアップ支援施設

利用部門
施設運営

Fukuoka Growth Nextは、福岡市と民間企業が連携して運営するスタートアップの創業支援施設。仕事のスタイルに合わせたワークスペースや、オープンで心地よい空間を提供し、独自のプログラムで経営から実務までのさまざまなサポートを提供している。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

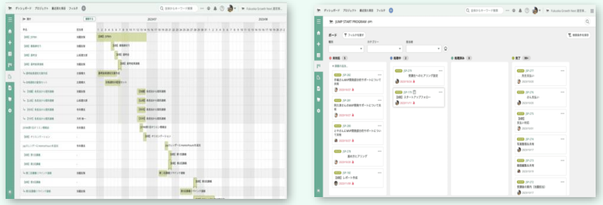
ITリテラシーにかかわらず「直感的」に利用できることがBacklogの魅力

▶ Backlog導入前は利用するツールを統一していなかったのでしょうか。

ツールとしてはGoogle Workplaceが導入されていて、ツールは統一されていたんです。ただ、プロジェクトごとの課題やタスクの確認、といったプロジェクト管理が人それぞれだったようです。しかし、統一しようにもチームはさまざまな組織からFGNに関わる人が参加していて、各社で使っているツールが違ったりすることから、ツールの選定がなかなか難しかったようです。そういった中で、高度な機能を持ちながら、誰にでも手軽に使えるツールとしてBacklogが選ばれたのではないかと思います。

▶ ほかに導入の決め手があれば教えてください。

人数が増えても料金が変わらないのはありがたいですね。経済的な面だけでなく、ITツールは「ユーザーが増える度に社内で経費増額の承認を取らなくてはならない」という事務作業の手間もあります。これがわりと面倒なのですが、Backlogではそういう手間もなくなって楽ですね。



膨大なタスクも、ガントチャートやボードで見れば担当や進捗状況がひと目で確認できる

ガントチャートとボード機能でプロジェクト全体の進捗をチェック

▶ イベントプロジェクトの運営にBacklogをお使いいただいていますが、使い勝手はいかがでしょうか。

縦軸に作業内容、横軸に時間を配した「ガントチャート」が、大変便利だと思っています。私たちはイベントのプロジェクトがスタートする前段階から、いろいろと企画や準備しなくてはならないことがあるのですが、そういった細かなタスクも一つひとつ記載していくようにしています。細々とした事柄の確認や、担当者の割り振りなどは、Backlogのガントチャートで管理すると、全体像がすぐ見えますね。

▶ ガントチャートはたしかに一目見るだけでチーム全員のタスクや、全体のスケジュール感が把握できますね。担当者それぞれのタスクの進行状況についてはどのように管理されていますか？

「ボード」を開くと、「未対応」や「処理中」「処理済」といった状態ごとにそれぞれのタスクが表示されます。私たちは企画ごとに週1回ほどの定例ミーティングをしますが、ボードを見て進捗に気になるところがあれば、その担当者に「困っていることがないか」と、直接声をかけられます。担当者自身も自分の進捗を客観的に把握できるので、大きな遅れがトラブルになる前に、周りに相談や時間調整などの自主的な対策を講じることができます。

「こんなに簡単にできちゃっていいの！？」他社システムとの連携に感動

▶ Backlogとほかのシステムとの連携はされていますか？

FGN事務局ではSlackと連携していまして、新しくBacklogに課題が登録されるとすぐSlackに通知されるようになっています。私はプロジェクトを管理している立場なので、課題の登録や返信が滞りなくされているかどうかが常に気になってしまいます。ですので、この連携はとても助かりますね。しかも、連携の設定がBacklogでは非常に簡単です。ツールの連携はちょっとしたコードをいじったりしないといけないイメージだったので、私は今回も「ああ、面倒だな」という気持ちで挑戦したのですが、本当に簡単にできました。「こんなに簡単にできちゃっていいの！？」と驚きました（笑）。

▶ ほかにBacklogを活用した全体での効果として、何かお気づきの点がありますか。

何といっても、タスクの抜け漏れがきっちりと防げるのがいいですね。また、皆で共通のツールを持たないと、情報が個人の元で埋もれてしまったり、その人がいないと閲覧できなかったりする危険がありますよね。Backlogのおかげで、そういった属人化のリスクがほぼ解消しました。過去の資料もBacklogの中に残っているので情報不足の不安もなく、話し合いをする上で時間の節約にも役立っています。チームでの仕事にBacklogはなくてはならないものだと実感しています。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

Backlog
導入事例12選
Case 12

株式会社キーワードマーケティング

https://backlog.com/ja/customers/case-study-keyword-marketing/

Backlog導入で効率的な広告運用支援を。
対応案件は10倍に増えるも業務管理の手間は1/10に削減！

キーワードマーケティングでは、円滑な広告運用支援のため2拠点間で分業しながら協働しています。拠点間でのタスクの受け渡しや業務の進捗管理にBacklogを活用。Backlog上でのタスクの一元管理により、対応案件10倍増でもスムーズな対応を実現しました。



	Backlog 導入前	Backlog 導入後
拠点間協働の効果	● 依頼する側である東京本社からは佐賀支社の業務状況が見えず、依頼過多に陥りがちだった ● 依頼を受ける側である佐賀支社では、依頼が同時並行した際に混乱が生じたり抜け漏れが発生したりしていた	● 本社、支社でお互いに進捗を把握しやすくなった ● 依頼者からの指示の追加や編集履歴が確認できるため、依頼の見逃しやタスクの抜け漏れがなくなった
タスク管理の効果	● チャットではどの依頼に対しての返信なのかがわかりづらく、見逃しが発生 ● 業務の全体像の把握や対応件数の集計が難しかった	● タスクの一元管理により、対応案件10倍増でもスムーズな対応が実現し、業務管理の手間は1/10に削減 ● Backlogの課題を見ればすぐに対応状況がわかるため、クライアントとの調整も容易になった

業種
広告代理店

利用部門
広告・マーケティング

広告とPRの連動施策である検索創出型マーケティング（SCM）をはじめ、運用型広告の代行やコンサルティングおよびインハウス支援を行う株式会社キーワードマーケティング。

広告運用の機能を持つ東京本社と、オペレーション業務を担う佐賀支社との分業体制でクライアントの広告運用支援を行っている。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

広告運用におけるオペレーション業務のタスク受け渡しにBacklogを活用中

▶ 現在、どのような場面でBacklogをご利用いただいていますか？

東京本社からの依頼を管理するためにBacklogを活用中です。広告入稿、レポーティング、デザイン、ツール開発、ブログ執筆、情報収集など、業務ごとにプロジェクトを作成し、各タスクの進捗管理を行っています。

東京本社からの依頼はGoogleフォーム経由で受け付けています。フォームとBacklogを連携させているので、依頼内容が送信されると、課題が自動で登録される仕組みになっているんです。





依頼者はGoogleフォームに必要事項を記入。
入力された内容は自動的にBacklog上で課題起票される

依頼を受けるにあたって知りたい情報は、担当者の氏名、クライアント名、希望の納期、対象の広告媒体、それから具体的な指示内容です。

東京本社の依頼者にBacklog上で課題を作成してもらうとなると、人によって依頼内容の順番や書き方がバラバラでわかりづらくなってしまう懸念がありました。そのため、フォーマットを統一化する狙いで、このような運用方法にしたんです。作業の変更や追加の依頼が生じた際には、Backlog上の課題でコメントのやり取りをしています。

Backlog上でのタスクの一元管理により、対応案件10倍増でもスムーズな対応を実現

▶ Backlogを導入してから、どのような効果がありましたか？

お互いに進捗の把握をしやすくなったこと、それに伴いクライアントとの調整も容易になったことが最大の効果だと感じています。

シンプルなデザインなので、ダッシュボードを開けば未完了の課題が何件あるのかをすぐに把握できますし、変更依頼の履歴や各タスクにおけるやり取りもさかのぼって確認しやすくなりました。

また、案件が増えても変わらずスムーズな対応ができているのは、Backlogのおかげだと思います。実は、Backlogを導入した当時と比べて、佐賀支社での月間の対応件数は10倍近くになっているんです。混乱が生じそうな場面でも、まったく問題なくタスクを実行できています。

それから、導入の決め手にもなった、コストパフォーマンスの良さを引き続き実感しています。他のツールだと、アカウントが増えるにしたがって費用もかさんでしまいがちですが、Backlogはそういった心配も一切ありません。

佐賀支社のメンバーも、タスクの進捗管理がしやすくなり、業務の効率化が図れたと感じています。Backlogには依頼者からの指示の追加や編集履歴が残るので、依頼の見逃しやタスクの抜け漏れがなくなり、効率的に本社からの依頼に対応できるようになりました。

また、Backlog上でタスクを一元管理するようになった結果、自分はもちろん他のメンバーの業務進捗や現在抱えているタスク量が一目瞭然になりました。おかげで特定のメンバーにタスクが集中する状態を防げています。オペレーションリーダーの業務管理における手間と工数も、10分の1ほどになりました。

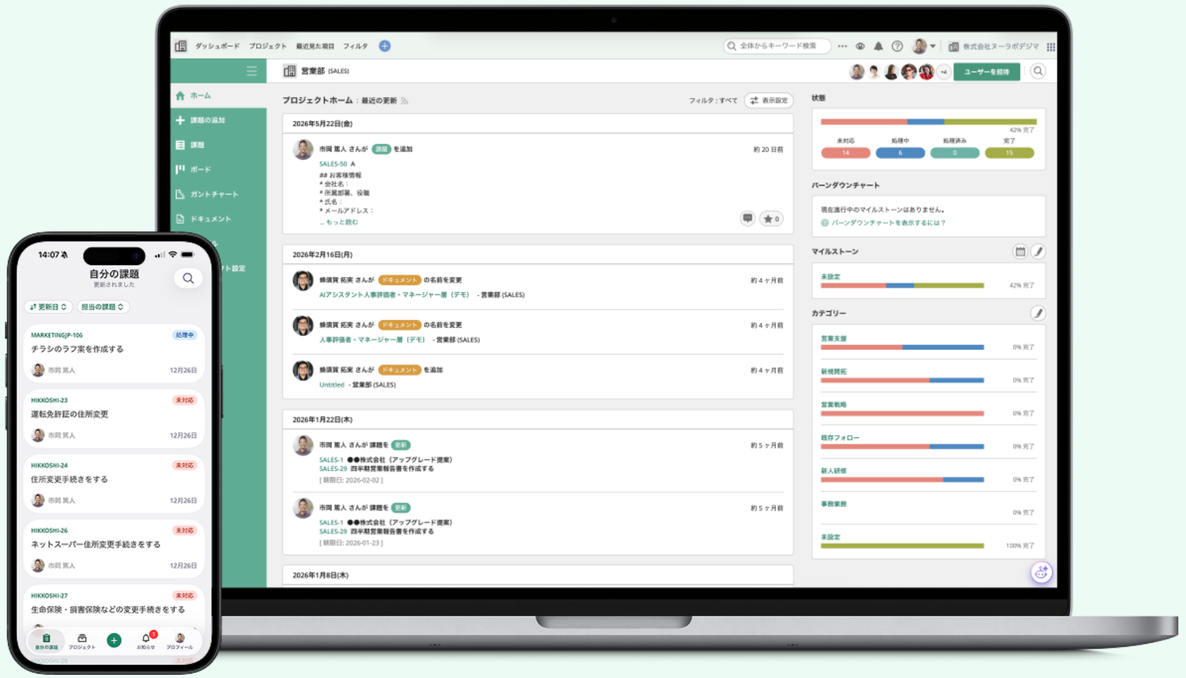
© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

backlog by nulab

チームで使える
プロジェクト・タスク管理ツール

Backlogはシンプルな操作性と親しみやすい見た目で、

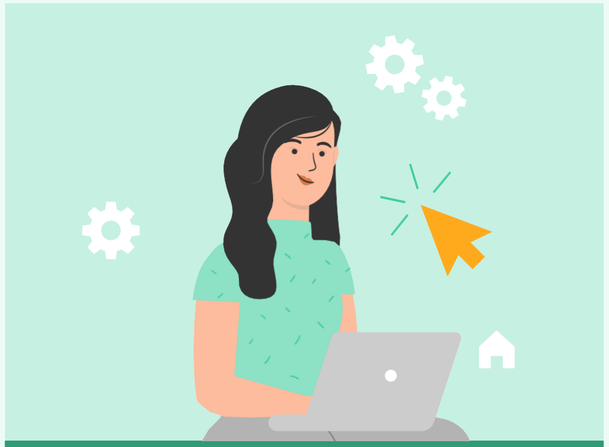
誰でも直感的に使えるプロジェクト・タスク管理ツールです。



© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

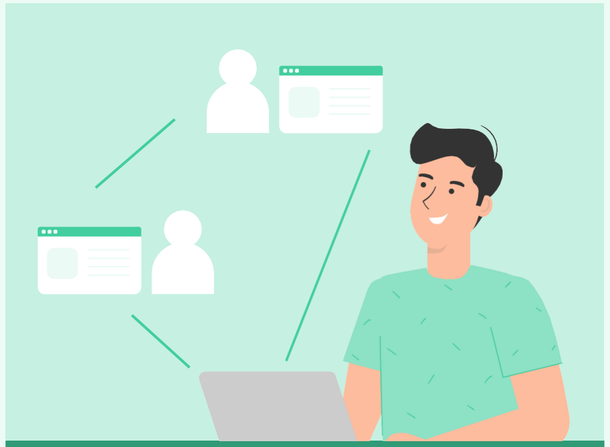
backlog by nulab

驚くほど「簡単に」
プロジェクト・タスク管理ができる



シンプルな画面（UI）

直感的で
ユーザーフレンドリーな
デザイン



進捗状況を視覚的に管理

チームメンバーの担当作業と
進捗状況が
簡単に見える化



コミュニケーションや情報共有が円滑に

タスクに紐づいた
コミュニケーションで
情報の分散を防ぐ

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

backlog by nulab タスク管理の悩みを解決

| 導入前 |

- 誰のタスクなのか？
- タスクの期限・担当者の進捗状況がわからない
- Excelでの進捗管理は更新に時間がかかる

どのタスクをいつまでにやるのか把握が煩雑



| 導入後 |

- タスクの担当者、進捗状況が一目でわかる
- 進捗状況はメンバーが更新常に最新情報を反映

タスクの見える化で着手漏れ・期限遅れなし

メンバーのタスクを見える化　　チームのパフォーマンス UP

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

チームの仕事を、前に進める

Backlog AIアシスタント



Backlogに蓄積された情報をもとに、日々の業務判断と進行を支援！
（入力・出力データは学習に利用されません）

- 課題の作成、要約
- ナレッジ検索
- プロジェクトの状況整理
- レポート生成
- メンバーの課題進行状況
- 評価準備 など

Backlog AIアシスタントは、プレミアムプラン・プラチナプランの管理者および一般ユーザーがご利用対象です。本機能の詳細はこちらをご覧ください。

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

オンラインセミナー・トライアルのご案内

チームでのプロジェクト・タスク管理に課題をお持ちの方は、
Backlogの無料オンラインセミナーや無料トライアルをご利用ください



オンラインセミナーの概要

- プロジェクト・タスク管理のBacklogとは？
- Backlog導入でどんなメリットがあるの？
- 実際のBacklog画面を見ながら利用シーンを紹介

オンラインセミナーはこちら



トライアルの概要

- 30日間無料で利用できる
- フォームに情報を入力すると、すぐに開始
- プランの全機能が使える

無料トライアルはこちら

サービスページはこちら

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.

会社概要

社名	株式会社ヌーラボ
設立	2004 年 3 月
事業内容	チームのコラボレーションを促進するサービスの開発・提供 ● プロジェクト・タスク管理ツール「Backlog」 ● オンラインホワイトボードツール「Cacoo」 ● 組織の情報セキュリティ・ガバナンスを強化するツール「Nulab Pass」 ● ワークフロー自動化ツール「Nulab Flowbase」
本社	福岡県福岡市中央区天神一丁目11番1号

© 2026 Nulab Inc. All rights reserved.